

## 編集後記

<\*> 本号の原稿締切日は10月末日でした。10月は学会、学期はじめ、科学研究費の申請、それに行楽が重なっていつでも繁忙期。電話が鳴るたびに、また原稿の催促かとビクビクする季節である。執筆者の皆様大変ご迷惑をかけました。

<\*> 編集方針が流動的であるために、体裁は不揃いではあるが(カジュアル誌?)、第一線で先駆的役割をしておられる方々の御寄稿で内容的には非常に充実しており、これ一冊さえ座右にあれば、激変する世界のFIA研究の動態を透視できるものと自負しております。

<\*> 世界で最初のFIA専門誌である本誌の発刊は海外の科学者に大きなインパクトを与えたようです。外国人の入会や英文での寄稿が可能かどうか、海外から問い合わせがあり、また本会誌を英訳してくれないかとの要望もあります。GNP(FIA)一位の日本で発行されている本誌の役割は? 国内誌か、あるいは国際誌として編集すべきか、ご検討ねがいます。

<\*> とりあえず、著名なRuzicka先生(デンマーク)やStewart先生(アメリカ)の本誌<指標>欄への御寄稿を検討中。

<\*> FIAを主体とする国際シンポジウム(161ページ参照)の第4回は1988年にアメリカで開催予定。第5回(1991年?)を日本で開催する希望があるならば、できるだけ早い時期に日本側の態度表明をすべきである(海外の声)。

<\*> 九州を起点として大阪、名古屋、千葉へと北上したFIA講演会は再び南下し、今回はFIA豊穡の地 岡山市です。10年をひと区切りとすると、来年はFIA活動の脱皮と飛躍の年にあたります。奇抜な発想のもとに、新しい可能性を示す研究発表を期待しています。

<\*> FIAの研究者分布マップを眺めてみると、FIA汚染度は一般に西高東低型で、北海道地区が極度に低く、日本海側もうすい。汚染されにくいのは、伝統的な風土や泰然とした研究基盤のせいなのか、疫学的(?)に興味がある。どなたか<指標>欄へご寄稿いただけませんか?

<\*> 表紙の右上に逐次刊行物に付与される国際的コード番号ISSNとCODENをつけました。

<\*> 前号は折角きれいなワープロ原稿を提出していただいたのに、印刷所のミスで印字が不鮮明でした。深くお詫び申し上げます。

<\*> 次号の原稿締切は4月15日(予告2月15日)です。到着順に優先的に審査(掲載)の対象としますので、早目に提出して下さい。(与座 範政)